

発見がたくさんあり、大変貴重な経験となった。

以上、自身のかかわった範囲で、史語所の建物を中心にその概要を説明した。個人的には、黄進興・王明珂の前所長や、専門分野が重なる顔娟英・劉淑芬の両先生には格別なご厚誼を賜り感謝してもしつくない。他にも私が所属した歴史学門の召集人であった張谷銘先生、副研究員の内田純子先生や読書会のメンバー、秘書の張秀芬女史をはじめとした職員の方々に生活面を含め何かと助けていただいた。この場をお借りして史語所の皆様に重ねて御礼申し上げたい。

今井漆さんと『天官書』

平岡隆二

今井漆（いたる、一九〇六一—一九九〇）さんが一九五〇年代にガリ版刷りで刊行した私家論文集『天官書』は、二〇世紀の京都で行われた科学史研究のなかでも、もっとも個性的でしかも画期的な成果だと思う。わたしがこれまで目にする事ができた計二十六輯

（ただし第七・二五輯は欠）は、総計七百頁を超え、収録論文七七本は、ほぼすべて今井さん自身の論文である。ただし各論文には著者名すら記さないことが多い。すべて自分でガリ切りして印刷・配布していたらしいから、これは公的な業績をねらったものというより、私的な同人誌と呼ぶべきかもしれない。実際今井さんはこれをごく一部の研究者にしか配らなかつたらしく、公共図書館にはほとんど収蔵がないため、かつては入手に困難をきわめた。しかし今は、今井さんの旧蔵書を架蔵する国立天文台が全文PDFをネットで無料公開してくれていて、容易にアクセスすることができる（<http://library.nao.ac.jp/kichou/imal.html>）。まことにありがたいかぎりである。

しかしこの『天官書』を貴重なものとしているのは、なによりも個々の論文の卓越した学術性にある。おもな主題は前近代の数理科学史だが、中国・日本を中心とする東アジアと、ギリシャ・ローマ、イスラーム、中近世ヨーロッパ間の科学交流について、解明した新知見は数知れない。その仕事は、当時まだ黎明期の科学史学において独自の学風を確立しており、その成果を同人誌で発表したこととあわせて、驚嘆を禁じ得ない。

わたしが『天官書』とはじめて出会ったのは、博士

論文のテーマを西洋ルネサンス天文学から、イエズス会布教を通じた東西天文学交流に変更しようとしていた二〇〇二年頃だった。難解な漢文・アラビア語・ラテン語・ポルトガル語・オランダ語文献の海を自在に遊び、テキストに秘められた文明交渉の痕跡を、豊富な古典語の知識と数理分析によってあざやかに浮かび上がらせる手法に衝撃をうけ、限りなくあこがれた。

わたしが初めて英語で書いた論文は、今井さんの仕事の継承・発展を意識したものだ。その後何本かの論文を積み重ねて博士論文にまとめることができたのも、今井さんというすぐれたパイオニアがいてくれたおかげである。そんな話を、生前の今井さんを知る京都の先生にしたところ、藪内清先生にとっても今井さんの仕事はインスピレーションの源泉で、非常に高く評価しておられた、と教えてもらった。自分が褒められたわけでもないのに、なんだか嬉しかったことを覚えている。

今井さんは人文研の報告書『明清時代の科学技術史』（一九七〇）にも寄稿しているが、科学史研究班との関わりは東方文化研究所時代までさかのぼる。一九三三年から上海自然科学研究所の助手（のちに技術員）として中国各地で天体・地磁気観測を行った今井さんは、その頃中国科学史の研究にもめりこんでい

た。一九四四年には病を得て帰国するが、一九四六年にはその成果をまとめた著書『中国物理雑識』を東方学術協会の叢誌として刊行しており、その出版には能田忠亮、藪内清、水野清一など研究所関係者からの援助を受けたと自序で謝意をのべている。

その後一九五一年に京大理学部上賀茂地学観測所の技官となり、定年まで勤めた。付設の官舎に住み込みで働いていた頃の日常は、毎夜零時頃に地震計の記録紙を交換した後、朝まで本を読んでいて、昼は寝ている「仙人みたいな人」だったという（竹本修三「上賀茂地学観測所時代の今井溱氏」）。

戦後に安定した研究環境を得た後、心血を注いで得た珠玉の成果を、毎夜ガリ版に切り続けた仙人のような今井さん。彼をこの仕事に駆り立てたものは、いったい何だったのか。『天官書』には何も記されていないが、それは前著『中国物理雑識』の自序で吐露される「中國に對するひたむきな愛」だったのかもしれない。

筆者個人の主観からすれば、「本書は」この十数年間に書き綴った戀文集でもある譯で、中國に對するひたむきな愛を現してゐる。筆者はこの空白な十年間、上海で此様な事に夢になつてゐた

譯で、何となく楽しく又何となく無責任な様で氣の引ける事である。しかし現在總べては過去の思ひ出となつて了つた。江南の四月、ウィルドの經緯儀にとまつたカササギも、測地テープでおひまはした黄蝶も、暖かつた背中の太陽の温度も、今は實は夢だつたのか、現だつたのか疑はれる。再びあれらの日々は歸つてくるだらうか。いま美しい現實には少しの保證も見出されない。唯だ上海で多數の歸化者を出してゐるといふ新聞記事に、何か或るチャンスをいつした様な、或るウラヤマしさを病牀で感じ涙ぐむのみである。しかし、自分はこの過去の過去をのり越えなければならぬ。實現するかどうかは別としても、再び踏む中國への旅行準備を始めなければならない。

果たして中國への再踏査は實現したのだろうか。いずれ機会をみて調べてみたいと考えている。

